〔竹取翁物語下〕かぐや姫、月のおもしろう出たるを見て、常よりも物おもひたる樣也、ある人の、月の顏見るは、いむ事とせいしけれども、ともすれば人までも月を見てはいみじく泣給ふ、

〔後撰和歌集十戀〕月をあはれといふは、いむなりといふ人のありければ、　よみ人そらず

獨ねのわびしきまゝにおきゐつゝ月を哀と忌ぞかねつる

〔源氏物語十二須磨〕入道の宮の、きりやへだつるとの給はせし程、いはんかたなくこひしく、をり〳〵のこと思ひ出給に、よゝとなかれ給、夜ふけ侍ぬときこゆれど、猶いり給はず、

みるほどぞそゞばしなぐさむめぐりあはん月の都はるかなれども

〔枕草子二〕すぎにしかたこひしきもの　月のあかき夜

〔枕草子六〕あはれなる物　二十六七日ばかりのあかつきに、物がたりしてゐあかして見れば、あるかなきかに心ぼそげなる月、山のはちかく見えたるこそいとあはれなれ、○中略あれたる家にむぐらはひかゝり、よもぎなどたかくおひたる庭に月のくまなくあかき、

〔枕草子十一〕月のあかきにきたらん人はしも、十日、廿日、一月、もしは一年にても、まして七八年になりても、思ひ出たらんは、いみじうをかしとおぼえて、えあふまじうわりなき所、人めつゝむべきやうありとも、かならず立ながらも物いひてかへし、又とまるべからんをば、とゞめなどしつべし、月のあかきみるばかり、とほくもの思ひやられ、過にし事、うかりしも、うれしかりしも、をかしと覺えしも、只今のやうにおぼゆるをりやはある、こまの、物がたりは、何ばかりをかしき事もなく詞もふるめき、見所おほからねど、月にむかしを思出て、むしばみたるかはほりとり出て、もと見しこまにといひてたてる、いとあはれ也、

〔新古今和歌集四秋〕題そらず

ながめつゝ思ふもさびし久かたの月の都のあけがたの空

藤原家隆朝臣